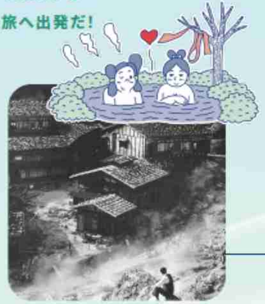
TSUMAGOI TIME TRAVEL

嬬恋タイムトラベル

約20万年前。嬬恋村の大地は巨大な湖の中にありました。湖の周りにはマンモスが闊歩していたその時代から、どんな歩みを経て「愛妻家の聖地」として繁栄する村へ変貌したのか。さあ、時空を超えた旅へ出発だ!

650年（白雉1年）～
温泉が栄え始める

嬬恋は、高原の村であり、温泉の村である!その礎を築いたのが、650年とされる鹿沢温泉の開湯。湯治場として、信州方面からの険しい峠を越えてでも浸かりたい出で湯として人気を博しました。そして江戸時代以降、標高1800メートルに位置し、万病に効くといわれる天空の療養泉・万座温泉が栄えます。その後も、嬬恋バラギ温泉、鬼押温泉、嬬恋高原温泉、奥嬬恋温泉、半出来温泉など、泉質のバラエティが豊富な温泉が平成に至るまで村内アチコチに湧出。旅人や地元民の心と体を癒し続けています。



昭和初期の万座温泉街の様子

復元された大笹関所門

3500年前頃
今井地区に縄文人が定住

1993年、今井地区・東平遺跡の発掘調査で、縄文土器が大量に出土し、3500年前に縄文人が定住していたことが判明。嬬恋の大地に人が暮らし始めたのは、それよりさらに遡り6000年前だとか…。山深く、冬の寒さが厳しい条件下でも、人はそれを遥かに上回るほどこの地の景色や空気に惹かれ、愛していたのですね。

110年頃（景行天皇40年）
ヤマトタケルノミコトが妻に愛を叫ぶ

日本の歴史で、最もロマンチックな伝説です。古代最強の英雄・ヤマトタケルノミコトは、東征という戦いの途上で最愛の妻・オトタチバナヒメを亡くします。妻は、海神（わたつみ）の怒りを鎮めようと、自分の身代わりとなって荒れ狂う海に身を投じたのです。戦いを終えたヤマトタケルノミコトは、四阿山（吾妻山：あずまやさん）の鳥居峠に立ち寄ります。亡き妻を想い、「あづまはや（＝あぁ、我が妻よ、恋しい）」と3度大声で泣き叫んだといいます。この愛妻伝説こそが、2000年の歴史を超え、「愛妻家の聖地」と呼ばれる村の原点となりました。

1662年（寛文2年）
真田氏が大笹に関所を建設

信州をおさめていた戦国武将・真田家初代幸隆の支援を受け、関所が建設されました。上州（群馬）と信州（長野）を結ぶ信州街道の要所となった大笹は江戸時代、宿場町として繁栄し、『東海道中膝栗毛』の著者・十返舎一九も度々訪れ、興味津々!関所沿いの信州街道（大笹街道）は「油街道」とも呼ばれ、夜を照らすタイマツの火の燃料だった「菜種油」を江戸へ運ぶ馬や人が絶えず行き交いました。そのにぎわいの跡は、関所周辺の建物にいまも残されています。

1193年（建久4年）
源頼朝の巻狩

2022年NHK大河ドラマでも注目を集める、鎌倉幕府初代将軍・源頼朝。軍事演習や武士たちの娯楽としてイノシシやシカなどを捕らえる「巻狩（まきがり）」を行い、浅間山の麓にある嬬恋の地を訪れました。そしてここをいたく気に入った頼朝は、鹿沢温泉や干俣神社、四阿山などにも足をのばし、地名の由来にもなるなどの数々の伝説を残しました。

9000年前頃
村の原型が誕生

あづまはや!

縄文時代

弥生時代

飛鳥時代

鎌倉時代

江戸時代

明治時代

大正時代

昭和時代

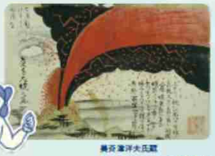
明治22年頃の嬬恋村役場

1889年（明治22年）
愛妻の村「嬬恋村」誕生

11ヶ村が合併し、「嬬恋」という村名が誕生しました。村名の由来は、ヤマトタケルノミコトが妻に愛を叫んだ伝説。世界で唯一無二の「妻に恋する」愛妻の村として、その知名度を高めていき、現在では「愛妻家の聖地」と呼ばれています。

1783年（天明3年）
浅間山の大噴火

村の行く末を劇的に変えた出来事こそ、江戸時代、1783年（天明3年）に起きた浅間山の大噴火です。最大の被害を受けた鎌原地区では犠牲者477名。噴煙は成層圏を覆い、関東一帯に大飢饉、北半球に冷害をもたらし、1789年から始まるフランス革命を引き起こした一因とも言われます。一方で、噴火で流れ出た溶岩や火山灰によりデコボコだった高原の大地はなだらかになり、キャベツなどの高原野菜が育つ大地が形成されるなど、それ以降の村に多大なる恩恵をもたらしました。村の完全復興まで実に100年以上。災害で築かれた村民のタフな精神は、いまも受け継がれています。



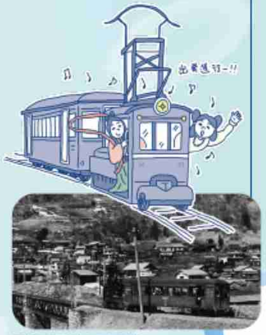
美斉津洋夫氏蔵
浅間縄文ミュージアム画像提供

1910年頃～1926年頃（明治43年頃～大正15年頃）
馬の名産地に

群馬県はその名の通り、古来「馬」の産地。明治の末からの馬の増産ブームで、天下に名を轟かせたのが嬬恋の馬（雌馬）でした。農作業や、生活のあらゆる場面での荷物運搬になくてはならない馬を、農民は家族同様に扱ったといいます。昭和30年代中頃から農業の機械化がはじまると、馬は村から姿を見せなくなりました。

1902年（明治35年）
浅間高原が、村所有の土地に

浅間山の裾野に広がる浅間高原は、明治後半までは国の直轄地でしたが、長年にわたる村民の奮闘の甲斐あって、ついに村所有の土地に!ここから、別荘や広大な高原野菜の畑の誕生へとつながっていき、現在の嬬恋村の風景がカタチづくられます。



草軽電車が村内を走る様子

1919年～1962年（大正8年～昭和37年）
草軽電車の時代

草津～軽井沢間の55キロを3時間半かけてのんびり走った草軽電車。嬬恋に開通すると、にわかに高原観光ブームを巻き起こし、観光の村の歴史がスタート!観光客を乗せるほかは、硫黄や木材などの物資輸送で日本を支えました。また村内に運ばれた物資から水力発電所が生まれ、村の近代化も一気に加速します。嬬恋では、1926年（大正15年）に全線が開通すると、嬬恋駅、上州三原駅、東三原駅、万座温泉口駅が生まれました。

1919年頃～1971年（大正8年頃～昭和46年）
硫黄鉱山の時代

温泉地で独特な香りを生むことでお馴染みの硫黄（いおう）。嬬恋は、日本の一大硫黄産地でした。奈良時代に発見され、江戸から火薬の原料とされるなどで本格的な採掘が始まりましたが、とくに大正以降、化学工業の原料として国内需要が増大。長野県境に近い「小串」、草津白根山麓の「吾妻」、「石津」の3鉱山が隆盛を極めます。鉱山労働に従事する移住者もどっと増え、全盛期の昭和35年、村の人口は最高潮の16000人を記録。嬬恋村、そして日本の産業発展・近代化に大貢献しました。

硫黄鉱山と労働者

キャベツ畑で農作業をする風景（昭和49年）

1955年（昭和30年代）～
キャベツ栽培の本格化

浅間山の噴火によって生まれた黒々とした火山灰土（黒ボク土）は、長らく作物が育たない大地とされてきました。しかし、戦後の土地改良技術により、極めて優れた土地として認識が一変。農業技術の発達や国道の開通といった交通網の発達も相まって、昭和30年代からキャベツ栽培が本格的に始まります。いまや、嬬恋を代表する特産物となったキャベツは、出荷量が50年連続日本一!そしてトウモロコシやじゃがいもなどの高原野菜やお米まで、農業が村の繁栄を支える大きな柱になったのでした。

1971年（昭和46年）
吾妻線の開通

吾妻川沿いをトコトコ走る群馬県のローカル線・JR吾妻線。その開通によって、東京からの電車でのアクセス時間が大幅に短縮!貸切電車「村民号」は、村内に団体旅行ブームをもたらしたそう。村の玄関口駅「万座・鹿沢口駅」の次は、関東最西端の駅であり吾妻線終点の「大前駅」です。